

日本語音声教育の新視点

土岐 哲

音声の学習については、よく偏って理解されることが多いものです。「舌先が歯茎に付くとか付かないとか、どうでもいいことを問題にする」というものです。そういうことを言う人々は、音声のことをほとんど知らないか、音声について偏った学習しかしなかった人でしょう。確かに伝統的な音声学では、意味を伝える部分を中心としていましたから、ある程度仕方ありませんが、音声には、「意味」を伝える部分（母音や子音、アクセント）と「意図」や「気持ち」を伝える部分があって、その両方が出来なければ、真の意味でのコミュニケーションは成り立ちません。幸い、ここ十数年来、その後者についての研究が急速に進んで来ました。ここでは、音声教育の中でも、意味を伝える部分だけでなく、そのコミュニケーションを実現させるために重要な役割を果たす部分（「リズム」や「イントネーション」）を中心にして、字数の許す限り分かり易く述べたいと思います。

キーワード：「つもり」の音声、「実際」の音声、気付き、リズム、アクセント、イントネーション

タイ語母語話者の日本語発音に関する干渉の考察と指導提案

アサダーユット・チューシー

タイ語母語話者は日本語を学習する時に、負の干渉によって、うまく日本語の発音ができないところがある。[g], [ɸ], [z], [ʃ], [ʒ], [ts], [w] 等のタイ語にない子音と母音の問題の他に、拗音 ([ja], [jw], [jo]) の問題、[s] と [ʃ] の前に発生する促音の発音問題、促音と長音の拍の区切りの問題、アクセントの問題等である。

本研究では、タイ語母語話者である執筆者はタイ語母語話者の日本語発音に関する先行研究を考察し、現代の発音問題に合わせ、助言をした。更に、追加部分として、タイ語母語話者の日本語発音の調査をして、主な問題点を取り上げた。

タイ語母語話者の観点から母語の干渉を考察する以外に、執筆者は、それに適応する指導の提案もした。本研究はタイ人と日本人のコミュニケーションが効率的になるために、タイ語母語話者が正しく日本語を発音できるような教育に多少役立つと希望している。

ビデオ会議システムを利用した遠隔授業の試み

原田明子

情報通信の発達により、日本語を学習する環境や手段は多様化しつつある。その中でも、海外において今後新たな展開が期待されるものとして、パソコンを利用した遠隔教育が挙げられる。今回、早稲田 Education (Thailand) Co., Ltd. では、2003 年 10 月より 2004 年 2 月までの 5 ヶ月間にわたって、実験的な試みとして早稲田大学大学院日本語教育研究科との間で、ビデオ会議システム (BitsMate) を利用した遠隔授業を行った。本稿では、この活動に参加した日本人の大学院生とタイ人学習者の報告書及びインタビューをもとに、その結果を報告し、考察を行う。さらに、こうしたシステムをどのように日本語教育に応用できるかを教育、研究、研修の 3 つの観点から分析し、具体的な応用事例について提言を行う。近い将来、通信情報環境が整備され、技術面での向上がなされれば、距離的制約を受けずに海外の日本語学習者が日本人と気軽にインターアクションできるこの遠隔システムは、今後更なる進歩が期待されるであろう。そのためにも、パイロットスタディを少しずつ積み重ね、参加者のフィードバックをもとにコースの問題点を改善し、効果的な活動デザインを考えていく必要がある。

日本語母語話者のスピーチレベルは、学習者に対してどのように変容するか —日本人学生とタイ人留学生の会話分析から—

猪俣公克

本研究では会話分析を行い、母語場面（日本人同士の場面）と接触場面（日本人と学習者の場面）における、日本語母語話者のスピーチレベルの変容を実証的に提示した。そして、ポライトネス理論 (Brown and Levinson 1987) の枠組から分析を加えた。結果では、接触場面において、より改まり度の高いスピーチレベルが選択される、単語レベルの発話が増える、などの傾向が示された。一方で、日本人インフォーマントのスピーチレベルは相手のスピーチレベルや、個性などにも影響を受けることもわかり、分布の多様性がみられた。学習者がこの多様性になるべく多く触れ、その動機について考える機会を得る事ができれば、日本人とのより良いコミュニケーション構築につながるのではないだろうか。

150時間で初級を終える ーチェンマイ大学での取り組み初年度の考察ー

三登由利子、Walaiporn Kanjanakaroon

チェンマイ大学では、2003年度の1年次のカリキュラムを見直し、それまで1年半かけて行っていた「初級」つまり日本語能力試験3級の範囲の授業を1年で終わらせることにした。時間数で言う、以前は3学期195時間だったのが、2学期150時間に短縮されたことになる。

本論文は、初級のカリキュラムをこのように変更するに至った背景、初級カリキュラムの概要、授業に対する学生の反応等について報告するとともに、カリキュラムを改善しようとする教師の意思決定の過程を記述する。

さらに、「教師が教えようと計画したもののすべてが、学習者全員に、しかも一様に定着することなどありえない」というカリキュラムの設計方針について述べる。また、1年間の授業実践を振り返って、上記の方針が達成できた点とできなかった点についてその理由を考察し、今後の対策について述べた。

初級後半に見られる初級前半の文型の頻出度 ー「文型」に対する新たな認識を求める手がかりとしてー

森 康真

海外で日本語を教えることは、日本国内の日本語教育と異なって、様々な制約を受けた状況の中にある。この状況下で教師は学習者に効率よく、効果的に指導に当たっている。一方で、教科書の文型（含語彙・文法）の単線的な積み上げだけでは、学習者の日本語・運用力の養成は不可能である。当然、教室活動を活発化させなければならない訳であるが、上記の制約もあって、困難な教室運営を強いられている。この問題を解決すべく、教師に何ができるか。教師ができることを、教科書の構成の要である「文型の学習」、そして「教室活動」を言語活動化させるプロセスの中で、探るのが目的である。

研究内容は、まず、教師と学習者の相互作用を言語活動化させる媒体である「教科書分析」から行う。教科書分析の対象として『みんなの日本語』を取り上げ、初級前半の文型が初級後半の「会話文」の中でどの位の頻度で現れるかを調べ、教科書の「課」の中心を占める「文型」についての扱われ方を見る。次に、調査した結果に基づいて、学習者の「文型の学習」の立場から「文型」を捉え、「文型と文型の関連性」を考察した。最後に学習者の「文型学習」を「運用志向」に転換させる観点から「文型」に対する新たな認識を私見として述べ、本研究の結論とした。

タイ人留学生のコード・スイッチングの使用実態

～文法的観点に注目して～

Siriporn Iampongsai

現在、日本は多言語多文化社会になりつつあり、日本語学習者をはじめ、日本に滞在している外国人の数が、年々増加している。また、タイ社会も、多民族で構成されている多文化多言語社会であり、タイに滞在している外国人も増加している。日本においてもタイにおいても、二言語環境下にいる彼らの言語運用を観察すると、周りの人とコミュニケーションを図る際、発話相手や場面などによって母語と日本語を巧みに切り替え、コード・スイッチング（以下、CS）を行っていることに気づく。そこで、本研究は彼らのこのような言語行動をより理解するために、タイ人留学生同士の電話会話を資料とし、コード・スイッチング（以下、CS）を文法の観点から分析し、使用実態を明らかにすることを目的とする。CSの生起率を割り出した分析の結果、文中CSは文間CSより圧倒的に高い割合を占めていることがわかった。次に、タイ語から日本語へのCSにおける文法的単位を調べた結果、CSはいろいろな単位で起きていることが明らかになった。最後に、文法的なルールについて、CSルールが存在していることが明らかになり、本研究では、6つのルールが観察された。本研究の結果から、タイ語と日本語のような異なる文法体系や文法的な規則を持っている言語間においてもCSが行われることが明らかになった。

タイにおける基礎日本語教育の研究

プラニー・チョンスッチャリットタム

本研究は、タイ国内で主専攻として日本語教育を開設している大学、中等学校ならびに初級日本語を教えている機関を対象として行われた。研究目的は、基礎日本語教授の現状の実態調査とタイ国内及び日本の主な日本語教育機関で使用されている基礎日本語教科書の調査、分析（主として文法事項、語彙、漢字について）で、タイ国内の日本語教育を一貫性あるものとし、タイ人学習者及びタイ社会の要望に柔軟に応えられる能率的な日本語教育を実現することである。

まず、アンケート調査を基にタイ国内の中等教育機関で多く採用されている基礎日本語教科書4種を選出した。その他に同じくタイ国内の大学や日本で使用されている基礎日本語教科書8種と参考書1種を加え、全部で教科書12種と参考書1種について文法事項、語彙、漢字をそれぞれ調査分析したところ、次のような結果となった。13種のうち6種以上に提出されている頻度の高い文法事項は全部で269項目、5種以上に提出されている頻度の高い語彙は全部で1443個、9種以上に提出されている頻度の高い漢字は全部で308字である。

観光学科4年生の一日ガイド実践報告

野阪智恵子

長期間日本語を学びながらも、日本語を使う職場への就職率も少ない我が校では、日本語を実際に使う場がなく終わってしまう。それを残念に思い、彼らのなりたい職業であるガイドでそれを生かす機会を設けようと、この一日ガイドを企画した。

ツアーは午前と午後に分け、学生も二つに分ける。ナコンパトムで有名なスポットを2つ選び、それを午前の一つ、午後の一つ案内する。

その学期の学習内容は、ツアーで使用する観光用語を中心に行った。そのため、学生は学習内容が当日に必要なようになってくる実用語としてとらえ、大変意欲的であった。また、日本人や日本文化に改めて興味を持ったようである。

ツアー後、日本語が上手く使えなくて悔しがる学生が多く見られた。しかし、それはまた彼らの日本語学習への意欲を持たせたようである。また地元を案内する楽しさも味わえたようである。

日本語を実際に使い、日本人と接することができた、というかけがえのない経験ができたこのツアーを次回も行いたいと考えている。

「日本人教師との一対一の会話練習活動」と学習者による評価

関 裕子 松原 潤

筆者は日々の教授活動を通して、また、学習者と接する中で、「基本的な会話のやりとりや自分の伝えたいことを日本語で表現すること」が困難な学習者が多いのではないかと感じていた。そこで、3年次後期の会話の授業で、正規の授業時間外に1回20分から30分間、教師と学習者が一対一で会話の練習を行う活動を導入した。本稿はこの活動の実践とそれに対する学習者の評価についてまとめたものである。

この活動に対する学習者の評価から、この活動は1回の練習時間や活動実施時間など、時間的な問題を抱えているものの、教師と一対一で会話の練習をするという方法について、学習者は肯定的な評価をしていることがわかった。また、同時に行った自由記述による学習者の自己評価では、この活動が学習者の話す能力と、日本語学習に対する意識にプラスの変化をもたらしたと解釈できる回答がいくつかみられた。

観光事業の日本語

Seksan Chantarachamnong

国民のために教育に投資することによって、人を作ること、つまり人材を育成することは国の経済や社会などを永久に安定できるようにするやり方である。国王、政府機関及び各種の教育機関の協力によって「人工衛星教育財団」が創設された。その後、いろいろな教育団体の協力によって多様な教育番組が製作されて、UBC を通じて 1998 年にはじめて放送された。タイ国文部省に所属する私どもラーシャマンカラー国立学校もこの任務に協力させていただいている。ラーシャマンカラー国立学校が製作している教育番組の一つは「観光事業の日本語」という番組で、2003 年度から UBC の 13 チャンネルで放送してきた。2003 年度の番組を制作する段階と仕事の成果は「観光事業の日本語」という教育番組の記事として発表した。

日本語教師研究会 (JTAT)

ソイスダー・ナラノーン

日本語教師研究会 (JTAT) は、2003 年 7 月 5 日、有志による第一回運営委員会により設立された。本会の主な目的は、以下の通りである。

- 1) 日本語教育に関する知識・情報を交換し、共有する。
- 2) 日本語教育・教授力の水準を向上させる。
- 3) タイ国における日本語教育を発展させる。

本会はその目的を達成するため、過去に二回のセミナーを開催した。第一回のセミナーは「タイ国における日本語教育の現状」という題目で、2003 年 10 月 11 日に開催された。引き続き、第二回のセミナーは、2004 年 3 月 13 日に開かれた。参加者を対象としたアンケートの結果、どちらのセミナーも高等学校・大学の教師から高い評価を受けた。

本会は、2004 年 5 月現在、96 名の会員を有している。原則として会費は年額 100 バーツで、会員は二回連続して無料でセミナーに参加できるほか、年に二回、ニュースレターの配送を受けることができる。今後、本会の活動の拡大が望まれるが、「研究会」という小さな集まりから「学会」にまで発展できるかどうかは会員の力によると考えられる。

「にとって」についての一考察

－中級指導の試み－

藤井明子

中級前期の学習者の作文に「にとって」の誤用例がなぜめだったのか。「にとって」の意味と用法から考えたい。

「にとって」は、「ある立場、視点からみれば」という意味を表し、文末には話し手の評価、価値判断を表すことが多い。「好きだ」「上手だ」「賛成」「反対」「感謝する」などの表現は文末に來ない。これはこれらの表現が、常に「ある立場、視点から」しか用いられないからである。「にとって」は「ある立場、視点から」でなくとも用いることのできる判断、評価の表現とともに用いることができると言える。「大切だ」「深刻だ」「問題だ」などの表現、可能、不可能を表す表現などである。

本年度のタスク活動ではそれぞれの場面での「にとって」の使い方を練習することはできたが、「にとって」が使える場合と使えない場合の明確な使い分けについては指導できなかった。今後は、この点の説明・指導について考えていきたい。

日本語教育のためのカタカナ表

宮本雄一郎

日本語の表記には、ひらがな、カタカナ、漢字が用いられる。このうちカタカナは主に外来語の表記に用いられている。カタカナにはひらがなと同じように「アイウエオ」からはじまる五十音表がある。現代日本語では、外来語をできるだけ原語に近い音で表そうとするため、語によってはこの五十音表の音だけではあらわせない場合がある。

たとえば、英語の「party」「share」「check」の [ti] [ʃe] [tʃe] である。これをカタカナで書くと「ティ」「シェ」「チェ」となるが、これは五十音表にはない特別な書き方である。日本語学習者は初期にひらがなとカタカナを学習するが、この時期にカタカナの特別な書き方を習得することは容易ではない。本論のカタカナ表は、特別な書き方のうち、一般的によくみられるものを取り上げたものである。従来の五十音表に特別な書き方を加えてひとつのカタカナ表を作成した。これを初期のカタカナ習得に役立てていきたい。

タイの学校制度外教育と日本語教育

海老原智治

本稿はタイの学校教育制度上の教育形態のひとつで、自学自習の学習を基本として主に義務教育を受ける機会を欠いた者を対象とする「学校制度外教育」について、その概要及び日本語教育の位置づけと現状をデータとして報告する。学校制度外教育の設置6課程のうち継続学習課程が初等から中等後期までの一貫した教育課程を有する。継続学習課程の中等後期カリキュラムには選択科目として日本語の設定がある。開設状況は統計がなく不明である。現在筆者が調査中だがバンコク都内では開設実績が全くないことがわかった。今後開設に至るには学習者確保・教科内容の策定・教員確保の問題が解決される必要があると予想される。開設後は学校制度外教育の特徴から日本語教員にもこれまでの学校教育（学校制度内教育）とは異なった教材や指導法の対処が要求されると予想される。

オリジナル初級日本語教科書の改訂作業における方針・手順・方法

鶴町佳子

筆者が勤務するラチャバット大学アユタヤ校では、15年ほど前から初級日本語文法を教えるのにオリジナルの教科書を使用している。この教科書は、作成以来少しずつ改訂が加えられながら使用されてきたが、いくつかの大きい問題点があったため、2002年3月、日本語プログラムはこの教科書の大々的な改訂に着手した。この改訂は、開始から2年経った2004年現在も継続して行われている。

本稿においては、この一連の改訂作業における作業方針と作業手順、さらに具体的な方法について報告、紹介する。

高校生日本語学習者のニーズ調査（その2）

Tasanee Methapisit, Namthip Methasate

Somkiat Chawengkijwanich, Suneerat Neancharoensuk

本稿は高校生の日本語学習者の意識調査を行った結果をまとめたものである。調査の対象は、5-6コマの学習者と1-4コマの学習者の2グループである。本稿は後者の1-4コマの学習者の結果報告である。調査の主な質問事項は、なぜ日本語を選んだか、日本のどこに関心があるか、大学では日本語を継続するか、日本語のどこが難しいか、大学で学びたい日本語の科目は何か、将来どんな職に就きたいかなどである。この調査の結果から、1-4コマの学習者の日本語学習への関心は、5-6コマの学習者のそれとは違うことがわかった。日本語を専攻したい学習者は2割に留まったが、日本語学習を続けたいものは5割いる。この結果により学習者のニーズがより明確になり、大学ではどのような教育内容が要求されるかが分かった。

มุมมองใหม่ของการศึกษาด้านสัทศาสตร์ในภาษาญี่ปุ่น

TOKI Satoshi

ในการศึกษาวิชาสัทศาสตร์ มักจะถูกเข้าใจไปว่าเป็นการศึกษาในรายละเอียดปลีกย่อย เช่น “ปลายลิ้นแตะที่ปุ่มเหงือกหรือไม่” คนที่กล่าวเช่นนี้ คงจะเป็นคนที่แทบจะไม่รู้เรื่องวิชาสัทศาสตร์เลย หรือไม่ก็คงจะเป็นคนที่เรียนวิชาสัทศาสตร์แต่เพียงด้านใดด้านหนึ่งเท่านั้น

จริงอยู่ วิชาสัทศาสตร์ที่ได้ศึกษาสืบต่อกันมานั้น จะให้ความสำคัญในเรื่องของการสื่อความหมายเป็นหลัก แต่เสียงประกอบด้วยส่วนที่สื่อความหมาย (เสียงสระและเสียงพยัญชนะ การออกเสียง) กับส่วนที่สื่อ “เจตนา” และ “ความรู้สึก” ซึ่งถ้าไม่มีทั้งสองส่วนนี้ ก็ไม่สามารถสื่อสารได้อย่างถูกต้อง โชคดีในช่วงสิบกว่าปีนี้มีความก้าวหน้าอย่างมาก ในการวิจัยเกี่ยวกับเสียงในส่วนที่สื่อ “เจตนา” และ “ความรู้สึก”

ในบทความนี้จะอธิบายให้เข้าใจได้อย่างง่ายๆ เท้าที่เนื้อที่กระดากจะเอื้ออำนวยให้ โดยจะกล่าวถึง “rhythm” และ “intonation” เป็นหลัก ซึ่งแม้แต่ในวงการการศึกษาสัทศาสตร์ทั้ง “rhythm” และ “intonation” นี้ไม่ใช่เป็นแค่เพียงส่วนเดียวที่สื่อความหมายเท่านั้น แต่เป็นส่วนที่มีบทบาทสำคัญที่ทำให้การสื่อสารเกิดขึ้นจริง

การศึกษารับทวนของภาษาแม่ในการออกเสียงภาษาญี่ปุ่นของผู้พูดภาษาไทยและข้อเสนอแนะในการสอน

อัมภานุท ฐศิริ

ผู้พูดภาษาไทยประสบปัญหาจากการรับทวนของภาษาแม่ในการออกเสียงภาษาญี่ปุ่น ทำให้ไม่สามารถออกเสียงภาษาญี่ปุ่นได้อย่างเหมาะสม นอกจากปัญหาเสียงพยัญชนะและเสียงสระที่ไม่มีในภาษาไทย เช่น เสียง [g], [ɸ], [z], [ʃ], [ʒ], [ts], [w] เป็นต้นแล้ว ยังพบปัญหาเสียงสระประสม ([-ja], [-ju], [-jo]) ปัญหาเสียงกักที่เกิดก่อนเสียง [s] และ [ʃ] ปัญหาการแบ่งพยางค์ที่เกิดในคำที่มีเสียงกักและสระเสียงยาว ปัญหาระดับเสียง (accent) เป็นต้น

ในการศึกษครั้งนี้ ผู้เขียนซึ่งเป็นผู้ใช้ภาษาไทยเป็นภาษาแม่ได้ทบทวนงานวิจัยเกี่ยวกับการออกเสียงภาษาญี่ปุ่นของผู้พูดชาวไทย และนำมาปรับให้เข้ากับปัญหาการออกเสียงในปัจจุบันส่วนหนึ่ง และได้ทดสอบการออกเสียงเพิ่มเติม โดยศึกษาปัญหาสำคัญๆ จากผู้พูดภาษาไทยที่เรียนภาษาญี่ปุ่น

นอกจากการศึกษารับทวนของภาษาแม่จากมุมมองของผู้พูดภาษาไทยเองแล้ว ผู้เขียนยังได้เสนอแนวทางการสอนในเบื้องต้น โดยหวังว่าจะเป็นประโยชน์ในการพัฒนาการเรียนการสอนให้ผู้พูดภาษาไทยสามารถออกเสียงภาษาญี่ปุ่นได้ถูกต้อง เพื่อให้การสื่อสารระหว่างชาวไทยกับชาวญี่ปุ่นเป็นไปอย่างมีประสิทธิภาพ

Distance Learning Class via Video Conferencing System “BitMate”

HARADA Akiko

In accordance with the development of Information Technology, environment of the Japanese education has also been changing. At present, Japanese Education via Video Conference System is expected to expand its use for learners in overseas countries. This paper reports on the effects of interaction activity using BitsMate System between the Thai students at Waseda Education (Thailand) and the Japanese graduate school students at Waseda University from October 2003 to February 2004. Also, some concrete proposals using this Video Conference System are mentioned in terms of language education, language acquisition, language research, and non-Japanese teacher's in-service training.

How Japanese Natives Control Their Speech Level Towards Learner of Japanese?

INOMATA Kimiyoshi

The study analyzes the speech level in the conversation between Japanese Natives(JN) and Thai who is studying Japanese. All informants are university students. The study is planned and examined through the frame of Politeness Theory (Brown and Levinson 1987) By comparing the speech level of JN towards JN and JN towards learner ,the following results are shown.

Towards learners, JN are more likely choose formal speech level or words which doesn't contain any lexical structure nor speech level. Other valuables are also shown to influent JN's speech level, such as the speech level of interlocutors or their personality. It would be useful for the learners of Japanese to know the results to understand how Japanese communicate with learners and why they do so, so that they can build better relationship to JN.

ภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานภายใน 150 ชั่วโมง

- วิเคราะห์จากผลการเรียนการสอนในหนึ่งปีแรกของมหาวิทยาลัยเชียงใหม่ -

MITO Yuriko

วลัยพร กาญจนการณ

สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น มหาวิทยาลัยเชียงใหม่ ได้ร่วมกันพิจารณาหลักสูตรภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานโดยย้อนกลับไปดูผลในปีการศึกษา 2546 แต่เดิมภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานหรืออีกนัยหนึ่งก็คือการเรียนการสอนที่ครอบคลุมความรู้ระดับ 3 ซึ่งใช้เวลาหนึ่งปีครึ่งนั้น ได้รับการเรียนการสอนให้จบขั้นพื้นฐานภายในหนึ่งปี โดยที่จำนวนชั่วโมงแต่เดิมใช้เวลา 3 ภาคการศึกษา 195 ชั่วโมง ได้ปรับลดเป็น 2 ภาคการศึกษา 150 ชั่วโมง งานวิจัยนี้เป็นรายงานเกี่ยวกับภูมิหลังของการเปลี่ยนแปลงหลักสูตรการเรียนการสอน คำโครงของหลักสูตรขั้นพื้นฐานตลอดจนปฏิกิริยาของผู้เรียนต่อการเรียนการสอนซึ่งเกี่ยวข้องกับการเปลี่ยนแปลงหลักสูตรขั้นพื้นฐานนี้ และเป็นผลการพิจารณาตกลงร่วมกันของผู้สอนในการที่จะปรับปรุงหลักสูตร นอกจากนี้ยังได้พิจารณานโยบายของการวางแผนหลักสูตรที่ว่า “ผู้สอนเป็นผู้วางแผนการสอนทั้งหมด แต่การที่จะให้ผู้เรียนทุกคนบรรลุเป้าหมายนั้นเป็นไปได้ยาก” และวิเคราะห์ผลที่บรรลุตามเป้าหมายและไม่บรรลุตามเป้าหมาย ตลอดจนทิศทางการเรียนการสอนในอนาคตต่อไป

ความถี่ของรูปประโยคในภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานตอนต้นที่พบในภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานตอนปลาย

- เครื่องมือสำหรับการเรียนรู้วิธีการรับรู้รูปประโยคใหม่ -

MORI Yasumasa

การสอนภาษาญี่ปุ่นในต่างประเทศมีความแตกต่างจากการสอนภาษาญี่ปุ่นในสถาบันการศึกษาในประเทศญี่ปุ่น ซึ่งอยู่ในสภาพที่แตกต่างกันและมีข้อจำกัดที่หลากหลาย อย่างไรก็ตาม ผู้สอนภาษาญี่ปุ่นในต่างประเทศจะสอนอย่างมีประสิทธิภาพและเพียงพอต่อความต้องการของผู้เรียนเป็นเรื่องยากที่จะเพิ่มพูนความสามารถในการใช้ภาษาญี่ปุ่นของผู้เรียนในต่างประเทศโดยวิธีการเรียนรู้คำศัพท์ ไวยากรณ์หรือรูปประโยคเพียงอย่างเดียว หากแต่จำเป็นต้องให้ผู้เรียนมีโอกาสเรียนรู้ภาษาญี่ปุ่นโดยการทำกิจกรรมของผู้เรียนเอง กระนั้นก็ตาม ผู้สอนก็ยังต้องพบกับปัญหาต่างๆ เช่นการจัดกิจกรรมการเรียนการสอนในชั้นเรียน ซึ่งเป็นเรื่องยากที่จะจัดให้ผู้เรียนได้เรียนรู้โดยการทำกิจกรรมทุกๆ ครั้ง เพื่อตอบคำถามที่ว่าผู้สอนจะทำอย่างไรได้บ้างกับปัญหาในการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่น บทความนี้จะนำเสนอวิธีการและแนวคิดที่ผู้สอนภาษาญี่ปุ่นควรนำมาพิจารณาคือการใช้รูปประโยคในตำราหลักและการจัดกิจกรรมการเรียนการสอนที่เกี่ยวข้องกับการเรียนรู้ภาษาในชั้นเรียน เนื้อหาของงานวิจัย ประการแรกเกี่ยวข้องกับการวิเคราะห์ตำราเรียน ซึ่งใช้เป็นสื่อการเรียนหลัก แต่ยากต่อการสร้างแรงจูงใจของผู้เรียนให้เกิดปฏิสัมพันธ์กับผู้สอนได้ การสร้างปฏิสัมพันธ์ให้เกิดขึ้นนั้น ผู้สอนต้องจัดกิจกรรมต่างๆ ที่เกี่ยวข้องกับการเรียนรู้ภาษา ยกตัวอย่างเช่น ตำราเรียนชื่อ “Minna no Nihongo” จากการตรวจนับการใช้รูปประโยค พบว่าความถี่ของการใช้รูปประโยคทุกประโยคในขั้นพื้นฐานแรกๆ จะพบในบทสนทนาของขั้นพื้นฐานตอนปลาย ประการที่สอง จากการวิเคราะห์ผลการตรวจนับรูปประโยค แสดงให้เห็นถึงความสัมพันธ์ระหว่างรูปประโยคที่พบ โดยพิจารณาจากประเด็นในการเรียนรู้รูปประโยคของผู้เรียน กล่าวโดยสรุป การให้ผู้เรียนเรียนรู้รูปประโยคใหม่นั้น ผู้สอนจะต้องมองถึงโอกาสในการนำไปใช้ในชีวิตประจำวันของผู้เรียนด้วย

สภาพการใช้ Code Switching ของนักศึกษาไทยในญี่ปุ่น - วิเคราะห์จากหลักทางไวยากรณ์ -

ศิริพร เอี่ยมผ่องใส

ปัจจุบันสังคมญี่ปุ่นได้เริ่มเข้าสู่สังคมที่เรียกว่า "สังคมหลายภาษาหลายวัฒนธรรม" ไม่ว่าจะเป็นจำนวนผู้เรียนภาษาญี่ปุ่น หรือจำนวนชาวต่างชาติที่อาศัยอยู่ในประเทศญี่ปุ่นได้เพิ่มขึ้นทุกปี ในขณะเดียวกันสังคมไทยก็เช่นกัน สังคมไทยจัดเป็น "สังคมหลายภาษาหลายวัฒนธรรม" ประกอบด้วยคนหลากหลายเชื้อชาติ อาทิเช่นชาวไทยเชื้อสายจีน และชาวต่างชาติที่เข้ามาทำงานหรือประกอบธุรกิจในประเทศไทย และเมื่อเราสังเกตถึงพฤติกรรมการใช้ภาษาของผู้ที่สัมผัสและเข้าใจภาษามากกว่า 2 ภาษาจะพบว่ากลุ่มคนเหล่านี้มีการใช้ภาษาทั้ง 2 สลับเปลี่ยนกันไป ขึ้นอยู่กับสถานการณ์และคู่สนทนา

พฤติกรรมเช่นนี้ เรียกว่า "Code Switching (ต่อไปใช้ CS)" สำหรับงานวิจัยชิ้นนี้ มีวัตถุประสงค์ที่จะใช้ข้อมูลทางโทรศัพท์ของนักศึกษาชาวไทยในญี่ปุ่น เพื่อทำความเข้าใจเกี่ยวกับ CS โดยพิจารณา CS จากหลักไวยากรณ์ โดยดูว่า CS เกิดขึ้นได้ในตำแหน่งใดของประโยค CS มีกฎทางไวยากรณ์หรือไม่ และจากการวิเคราะห์ข้อมูลพบว่า CS จากภาษาไทยเป็นภาษาญี่ปุ่นนั้น นักศึกษาชาวไทยใช้ INTRASSENTIAL CS มากกว่า INTERSENTENTIAL CS เป็นอย่างมาก นอกจากนี้ CS จากภาษาไทยเป็นภาษาญี่ปุ่นยังเกิดขึ้นในตำแหน่งต่างๆ ของประโยค และในการวิจัยครั้งนี้ยังพบกฎทางไวยากรณ์ของ CS 6 กฎ

ผลจากการวิจัยครั้งนี้ ทำให้ทราบว่า CS สามารถเกิดขึ้นได้ระหว่างภาษาที่มีโครงสร้างและกฎทางไวยากรณ์ต่างกันเช่น ระหว่างภาษาญี่ปุ่นและภาษาไทย

การศึกษาภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานในประเทศไทย

ปราณี จงสุจิตรธรรม

การวิจัยนี้มีวัตถุประสงค์เพื่อศึกษาสภาพการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานในประเทศไทยและศึกษาวิเคราะห์เนื้อหาภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานทางด้านไวยากรณ์ คำศัพท์ และคันจิในตำราภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานที่ใช้อยู่ในสถาบันหลักทั้งในประเทศไทยและประเทศญี่ปุ่น เพื่อนำไปสู่การพัฒนาการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นในประเทศไทยให้เป็นระบบ สามารถตอบสนองความต้องการของผู้เรียนและความต้องการของสังคมไทยได้อย่างมีประสิทธิภาพยิ่งขึ้น

คณะผู้วิจัยได้วิเคราะห์ตำราภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานที่ใช้มากที่สุดที่สถาบันสอนภาษาญี่ปุ่นในประเทศไทยจำนวน 4 เล่มจากผลสรุปแบบสอบถามที่ตอบกลับมา กับตำราเรียนภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานที่ใช้อยู่ในสถาบันหลักทั้งในประเทศไทยและประเทศญี่ปุ่นอีก 8 เล่ม และเอกสารอ้างอิง (เกณฑ์การออกข้อสอบวัดระดับภาษาญี่ปุ่น ระดับ 3 และ ระดับ 4) 1 เล่ม รวมเป็น 13 เล่ม สรุปผลว่า หัวข้อไวยากรณ์ที่ปรากฏมากที่สุดตั้งแต่ 6-13 เล่มขึ้นไปมีจำนวน 269 หัวข้อ คำศัพท์ที่ปรากฏมากที่สุดตั้งแต่ 5-13 เล่มขึ้นไปมีจำนวน 1,443 คำ และคันจิที่ปรากฏมากที่สุดตั้งแต่ 9-13 เล่มขึ้นไปมีจำนวน 308 ตัว

The exercise of one day tour in my Rajabhat

NOSAKA Chieko

The students of my university studied Japanese for about 3 years. But they finished without the opportunities where they could use Japanese and this is about unfortunate. So I made the following exercise for students were divided into 2 tours which occurred in the morning and afternoon. They choose two places which are famous in Nakhon Pathom of which they gave a guide.

They studied Japanese for the tour during gave the term. Therefore they were able to recognize was useful and practical words they studied. Then they became interested in Japanese and Japanese culture once again.

When the tour finished, some students were disappointed because they couldn't speak Japanese with Japanese tourists. But the experience made them decide to improve their Japanese, and they could get a taste of guiding people around their local places of interest.

The tour made the students use Japanese and communicate with native Japanese.

Therefore I want to make this tour again.

กิจกรรมฝึกฝนบทสนทนากับผู้สอนชาวญี่ปุ่นแบบตัวต่อตัวกับการประเมินผลจากผู้เรียน

SEKI Yuko

MATSUBARA Jun

จากประสบการณ์การสอนและการคลุกคลีอยู่กับผู้เรียน ผู้เขียนรู้สึกว่ามีผู้เรียนที่มีปัญหาด้านการสื่อสารบทสนทนาขั้นพื้นฐานและสิ่งที่ต้องการจะสื่อให้ทราบเป็นภาษาญี่ปุ่นมาก ดังนั้นในวิชาเกี่ยวกับการสนทนาภาษาญี่ปุ่น (ปี 3 เทอม 2) จึงได้เริ่มให้มีการฝึกสนทนาตัวต่อตัวระหว่างผู้สอนกับผู้เรียน โดยใช้เวลาที่นอกเหนือจากการเรียนการสอน ประมาณ 20-30 นาทีต่อ 1 ครั้ง ในบทความนี้ได้รวบรวมการปฏิบัติกิจกรรมและการประเมินผลจากผู้เรียนเอาไว้

จากผลประเมินผู้เรียนในกิจกรรมนี้ ถึงแม้จะมีปัญหาด้านเวลาอย่างเช่นเวลาสำหรับฝึกฝนต่อครั้งหรือช่วงเวลาในการนัดพบเหล่านี้ แต่การฝึกฝนแบบนี้พบว่า ผู้เรียนเห็นด้วยกับการใช้วิธีการแบบนี้ และนอกจากนี้จากแบบประเมินตนเองของผู้เรียนซึ่งสามารถแสดงความคิดเห็นได้โดยอิสระ ก็พบว่าผู้เรียนบางคนมีทักษะด้านการพูดและทัศนคติต่อการเรียนภาษาญี่ปุ่นที่ดีขึ้นอีกด้วย

รายการภาษาญี่ปุ่นเพื่อธุรกิจการท่องเที่ยวโดยมูลนิธิการศึกษาทางไกลผ่านดาวเทียม

เสกสรรค์ จันทรวงศ์

ด้วยหลักการที่ว่า การสร้างคน หรือที่เรียกการว่า การพัฒนาทรัพยากรมนุษย์ โดยการลงทุนด้านการศึกษา เป็นการพัฒนาประเทศให้มีความมั่นคงทางเศรษฐกิจและสังคมอย่างแท้จริงและยั่งยืน มูลนิธิการศึกษาทางไกลผ่านดาวเทียมจึงถือกำเนิด ด้วยพระมหากรุณาธิคุณของพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัว และความร่วมมือจากหน่วยงานของรัฐและสถาบันการศึกษาต่างๆ ร่วมกันจัดทำรายการโทรทัศน์เพื่อการศึกษาแพร่ภาพออกอากาศ สถาบันเทคโนโลยีราชมงคลก็เป็นหน่วยงานหนึ่งที่ได้รับมอบหมายจากมูลนิธิให้เข้าร่วมจัดทำรายการ หนึ่งในรายการทั้งหมดที่สถาบันเทคโนโลยีราชมงคลจัดทำ คือรายการภาษาญี่ปุ่นเพื่อธุรกิจการท่องเที่ยว ถูกผลิตและแพร่ภาพออกอากาศทางสถานีโทรทัศน์ UBC ช่อง 13 ตลอดปีการศึกษา 2546 ที่ผ่านมา ตลอดปีการศึกษาที่ได้จัดทำรายการมีขั้นตอนการทำงานต่างๆ และเมื่อจบปีการศึกษามีการประเมินผลการทำงานดังที่รายงานไว้ในรายงานการปฏิบัติงานจริง เรื่องรายการภาษาญี่ปุ่นเพื่อธุรกิจการท่องเที่ยวโดยมูลนิธิการศึกษาทางไกลผ่านดาวเทียม

ชมรมครูภาษาญี่ปุ่นในประเทศไทย (JTAT)

สร้อยสุตา ณ ระนอง

ชมรมครูภาษาญี่ปุ่น (JTAT) เริ่มก่อตั้งขึ้นจากการประชุมครั้งแรกของคณะทำงานในรูปแบบของอาสาสมัครในวันที่ 5 กรกฎาคม 2546 ซึ่งวัตถุประสงค์หลักของชมรมมี 3 ประการคือ ติดต่อแลกเปลี่ยนความรู้และข่าวสารในวงการศึกษภาษาญี่ปุ่น ยกย่อง เพิ่มศักยภาพการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นและพัฒนาการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นในประเทศไทย

ชมรมจัดงานสัมมนาทางวิชาการไปแล้ว 2 ครั้ง ครั้งที่ 1 จัดในหัวข้อ "เกาะติดสถานการณ์การสอนภาษาญี่ปุ่นในประเทศไทย" ในวันเสาร์ที่ 11 ตุลาคม 2546 และครั้งที่ 2 ในวันเสาร์ที่ 13 มีนาคม 2547 ซึ่งทั้งสองครั้งได้รับเสียงการตอบรับเป็นอย่างดีจากครูชาวไทยในระดับมัธยมศึกษาและอุดมศึกษา

ปัจจุบันชมรมมีสมาชิกรวม 96 คน สมาชิกมีอายุ 1 ปีโดยเก็บค่าสมาชิกคนละ 100 บาท สมาชิกสามารถเข้าร่วมสัมมนาได้สองครั้งติดต่อกันและได้รับข่าวสารจากชมรมปีละสองฉบับ ในอนาคตคาดว่ากิจกรรมของชมรมจะขยายขอบเขตออกไป จากการรวมตัวของกลุ่มเล็กๆ อาจจะเติบโตเป็นสมาคมที่มั่นคงและยั่งยืน ทั้งนี้ทั้งนั้นย่อมขึ้นอยู่กับสมาชิกเป็นกำลังสำคัญ

Expressions with “ni-totte”

FUJII Akiko

“Ni-totte” (for~; to~) is used with expressions that refer to a specific (as opposed to a general) view. And “ni-totte” is generally used when estimation (e.g. “taisetsuda” - important, “shinkokuda” - serious etc.) is expressed. We can use those expressions with both general view and a specific view. On the other hand, we cannot use “sukida” (be fond of) “sanseida” (agree to) and some other expressions with “ni-totte”, since they are always only used with the specific view.

I have often wondered why intermediate students use “ni-totte” incorrectly, and then I found that I had to explain the difference between these expressions for estimation. And I wondered if I should prepare some activities in order to show the difference to the students.

A Katakana syllabary for Learners

MIYAMOTO Yuichiro

Japanese has three characters, Hiragana, Katakana and Kanji. We use Katakana mainly for writing words of foreign origin. Katakana has the same Japanese syllabary which starts with “A I U E O” as Hiragana. In modern Japanese, we write words of foreign origin in a similar sound to the original one as much as possible. Therefore there are some words of foreign origin that we can't write with sounds of the Japanese syllabary. For example, [ti] of “party”, [ʃe] of “share” and [tʃe] of “check” and so on. We write these sounds, 「ティ」 [ti] 「シェ」 [ʃe] 「チェ」 [tʃe] in Katakana. These sounds are special ones because they aren't in the Japanese syllabary.

Learners study Hiragana and Katakana at the beginner level. It's difficult for learners to master the special Katakana writing way in this level. This paper focuses on the special Katakana writing way that we often use. And for learners at the beginner level, I made a Katakana syllabary which had the special writing way.

การศึกษานอกระบบโรงเรียนของประเทศไทยและการสอนภาษาญี่ปุ่น

EBIHARA Tomoharu

บทความนี้รายงานภาพรวมลักษณะการศึกษานอกโรงเรียน ซึ่งเป็นรูปแบบการจัดการศึกษาอย่างหนึ่ง ที่มุ่งสร้างโอกาสทางการศึกษาสำหรับผู้ด้อยโอกาสในการศึกษาภาคบังคับ ส่วนฐานะและสภาพปัจจุบันของการจัดการเรียนการสอนวิชาภาษาญี่ปุ่นในระบบนั้น ในหลักสูตรทั้ง 6 วิชาของการศึกษานอกระบบโรงเรียน วิชาภาษาญี่ปุ่นถูกบรรจุอยู่ในการศึกษาระดับมัธยมศึกษาตอนปลายในหลักสูตรต่อเนื่องซึ่งมีหลักสูตรตั้งแต่ระดับประถมศึกษาจนถึงระดับมัธยมศึกษาตอนปลายอย่างต่อเนื่อง แต่สภาพการเปิดสอนวิชาภาษาญี่ปุ่นนี้ยังไม่ชัดเจน เนื่องจากไม่มีการสำรวจและเก็บรวบรวมข้อมูล ขณะนี้ผู้เขียนกำลังสำรวจอยู่และพบว่าในกรุงเทพฯ ไม่มีการเปิดวิชาภาษาญี่ปุ่น สำหรับการเปิดวิชาภาษาญี่ปุ่นคาดว่าจะมีปัญหาทั้งจำนวนนักเรียนที่สนใจเรียน การจัดเนื้อหาวิชาของภาษาญี่ปุ่นและการแต่งตั้งครูผู้สอน หลังจากได้เปิดแล้วคาดว่าจะครูผู้สอนภาษาญี่ปุ่นจำเป็นต้องจัดหาตำราและอุปกรณ์การสอนและวิธีการสอนให้สอดคล้องกับลักษณะการสอนในการศึกษานอกระบบโรงเรียน

เป้าหมาย ขั้นตอนและวิธีการในการปรับปรุงตำราภาษาญี่ปุ่นระดับต้น

TSURUMACHI Yoshiko

ที่สถาบันราชภัฏพระนครศรีอยุธยาซึ่งผู้เขียนทำงานอยู่ ใช้ตำราซึ่งจัดทำขึ้นเองในการสอนภาษาญี่ปุ่นระดับต้นมาเป็นเวลากว่า 15 ปี ถึงแม้ว่าจะมีการปรับปรุงตำราหลายครั้งแล้วก็ตาม ยังคงพบปัญหาบางประการอยู่ ดังนั้นตั้งแต่เดือนมีนาคม 2545 เป็นต้นมาโปรแกรมภาษาญี่ปุ่นได้ทำการปรับปรุงตำราครั้งใหญ่จนถึงปัจจุบัน ก็ยังอยู่ในระหว่างการดำเนินการปรับปรุงตำรา

ในบทความนี้จะแนะนำถึงเป้าหมาย ขั้นตอน ตลอดจนวิธีการในการปรับปรุงตำราโดยละเอียด

การสำรวจความต้องการของนักเรียนภาษาญี่ปุ่นในมัธยมศึกษา ตอนปลายระยะที่ 2

ทศนีย์ เมธาพิสิฐ
น้ำทิพย์ เมธเศรษฐ
สมเกียรติ เสงวณกิจวิธ
สุณีย์รัตน์ เนียรเจริญสุข

บทความนี้เป็นรายงานผลการสำรวจความต้องการของนักเรียนมัธยมศึกษาตอนปลายที่เรียนภาษาญี่ปุ่น เป้าหมายของการสำรวจแบ่งเป็น 2 กลุ่มคือ กลุ่มผู้เรียนภาษาญี่ปุ่น 5-6 คาบ และกลุ่มผู้เรียนภาษาญี่ปุ่น 1-4 คาบ บทความนี้เป็นรายงานผลของกลุ่มที่ 2 คือ กลุ่มผู้เรียนภาษาญี่ปุ่น 1-4 คาบ หัวข้อที่ได้ทำการสำรวจ ได้แก่ เหตุผลที่เลือกเรียนภาษาญี่ปุ่น ความสนใจเกี่ยวกับญี่ปุ่น ส่วนที่คิดว่ายากในภาษาญี่ปุ่น ความต้องการเรียนภาษาญี่ปุ่นต่อในระดับอุดมศึกษา วิชาที่สนใจเรียนเป็นพิเศษ อาชีพที่ต้องการทำในอนาคต ผลจากการสำรวจ ทำให้ทราบว่า ความสนใจของผู้เรียนกลุ่ม 1-4 คาบ ต่อภาษาญี่ปุ่นแตกต่างไปจากผู้เรียนกลุ่ม 5-6 คาบ ผู้ที่ประสงค์จะศึกษาภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาเอกมีเพียงร้อยละ 20 แต่ผู้ที่ประสงค์จะศึกษาภาษาญี่ปุ่นต่อมีย่อยละ 50 ผลจากการสำรวจนี้ทำให้เข้าใจความต้องการของผู้เรียนกลุ่มนี้ได้ชัดเจนยิ่งขึ้น และเป็นประโยชน์ต่อการจัดแผนการศึกษาในระดับมหาวิทยาลัย